

福澤諭吉が遺したもの

福澤諭吉は、昭和59年に聖徳太子に代わって一万円札の肖像となつた。そして今年中に行われる「改札」により福澤の肖像は渋澤栄一になるといふ。福澤が40年にもわたり一万円札の肖像として毎日のように私どもに親しまれてきたのはなぜだろうか。福澤といえ

ば幕末・維新期に西洋文明を取り入れ、新生日本の建設に精出すべしと説いた文明開化論者、欧化主義者として知られる。

この福澤を語る時に必ずのように言及されるのが、『福翁自伝』の中にでてくる次のようなエピソードである。無類の学問好きであった父、百助が中津藩では漢籍において他に敵う者がいないほどのレベルに達しながら、下級武士であつたがために学問を通じての身分上昇は叶わず、失意の人生を送つたという。

このことを慨嘆して福澤は「封建の門閥制度を憤るとともに、亡父の心事を察して独り泣くことがあります」と記し、「門閥制度は親の敵で御座る」という強烈なメ

立国は私なり、公に非ざるなり

ツセージを残している。

かくして福澤は旧社会の理不尽と闘い、親の敵を討つために西洋の学問の習得に努めるより他なしと意を固め、長崎にでて蘭学を学び、大阪では適塾において才能を開花させ、さらに上京して英学に転じ、ついには幕末・維新期における有数の知識人として縦横に活躍するに至つたことが「自伝」には躍動的に描かれている。

しかし、福澤が文明開化論者、啓蒙思想家としてみずからの人生を駆け抜けていったかのようによくみられる記述には誇張がある。おそろしくそのような記述は、第二次大戦後から冷戦崩壊の頃まで日本を覆っていた左翼リベラリズムの風潮の中で日本の知識人によって「造作」された非常に偏りのある福澤像ではないか。

福澤が旺盛な知力の限りを尽くして執筆した大作が明治8年の『文明論之概略』である。その執筆の熱気冷めやらぬ頃に福澤は『明治十年丁丑公論』を書いた。この論説は西郷隆盛を西南戦争に追い込み、西郷に自刃を強いた時つ逆賊と難じた時のジャーナリス

正論



拓殖大学顧問
渡辺 利夫

抵抗の精神衰退した日本

権威に求めたいという、おそろしくは無意識的な願望が偏りのある福澤像を生み出したのではないか。

「愛に遺憾なるは、我日本国に於て今を去ること廿余年、王政維新の事起りて、その際不幸にもこの大切な瘠我慢の一大義を害したることあり、即ち徳川家の末路に、家臣の一部が早く大事の去るを悟り、敵に向て曾て抵抗を試みず、只管和を講じて自ら家を解きたるは、日本の経済に於て一時の利益を成したりと雖も、数百万年養い得たる我日本武士の気風を傷つたるの不利は決して少々ならず」と語り、一日本武士の気風を傷つた人物は勝海舟その人だと言つたのである。